

## 道路防災総点検 雑感

針 生 眞 也<sup>\*</sup>

昨年8月に、建設省から（財）道路保全技術センター経由で、防災点検に関連した北信越地区の講師依頼があった。9月に千葉県の上野で講師のための講習に出席するように、との内容であった。全く気乗りがしないまま、当日を迎え、新潟から約5時間かけて現地に向かった。東京駅で指定された特急に乗り込むと、知った顔が多く同乗しており、背広姿で席に座っていた。私ときたら新潟でカントリーをしているせいか、作業着にアタックザック、そして、ご丁寧にそれにガリビエールのヘルメットをくくりつけていた。知り合いのダムコンの方に、「どちらのダムサイトの踏査ですか、忙しそうですね」と冷やかされる始末である。

千葉県の点検模式地の現場は海岸沿いに点在しており、夏の終わりとはいえ摂氏30℃は悠に越す状況の中で、50名の中年族達による落石崩壊の点検練習が始まった。模式地1地点では、まだ観察眼が慣れていないせいか、皆の評点にはばらつきがみられたものの、模式地2，模式地3，と進むにつれ、短時間で各人の評点に大差がなくなってきた。当日の講師のための“講師”であった、土研の某研究室長曰く、「流石に凄いメンバーが揃ったものだ。全国で既に終了済みの試行点検とは、格段の差がある、この人達に日本全国を担当してもらえば問題はないんだが」、と。冗談は、やめて欲しい、但し、単価によっては御相談に乗りますよ、といったのが、あらかたのメンバーの御意見であった。

この講習が終了しての感想は、講習内容のハード、ソフトとも考えさせられるものであった。いい加減な姿勢では、点検はできない、と痛切に感じて新潟に戻って来た。

さて与太話しはここまでとして、地区講習会の現地講師をさせていただいた時に感じたことを、述べさせていただく。講習を受けた方は6割程度は官側およびこの業界の技術者であると思うが、残る4割程度は間違いなく素人さん達

---

\* 応用地質株式会社・北信越支社

であった。即ち、現地での質問として、「すみません。地形遷急線て何ですか」「崖錐ってなんですか」などと言った、驚いた質問が飛び出す状況からも、察しがつく。参加者にきつい枠組みを設けないなかで出た現象であると思うし、またそれらの人たちを参加させた会社としては、講習を受けないと受注に支障をきたす、と心配して参加させた結果の現象でもあろう。この現象は、北信越ブロックに限ったことではない。しかし、この様な人達の少なくとも何人かは実際に点検をするのかと思うと、北海道の豊浜トンネル事故が、ついつい頭をよぎってしまった。仮に点検内容が不十分で、その結果として不幸にも事故が発生した場合、今後はその調査に対して、民事および刑事訴追はまのがれない方向に舵は取られていることを忘れてはならない。実際に現時点でも、それに類似した複数例の刑事裁判が進行中なのである。日本のコンサルタント業界は欧米型のコンサルタントとは異なる進化形態を辿ったものの、現状ではそれにゆっくりと近づきつつあるのである。何れにしても近い将来に、道路防災点検に携わる技術者への差別化は行なはれるはずであり、どの程度の篩い目かはわからないが、点検講習を受講した技術者は、篩にかけられる事になろう。

この点検が終了したあとで、自然界はどの様に点検結果に対しての“判定”を下すだろうか。神のみぞ知る、などとは云って居られないように思う。